# 生活新聞

Hakuhodo Institute of Life & Living

2·6

VOL.7 1987 No.1

博報堂生活総合研究所


# 妻が働きに出ると…

## 第2回パート主婦調査

# 働くならパート。雇うならパート。

いま日本の女子パートタイマー人口は、約333万人。女子雇用者の22%を占めている。
特に主婦では、フルタイムよりも、パートタイム志望が強い。
前回調査からすでに5年。オンナ情報が急増したこの5年間で、主婦のパート事情も異変を見せはじめている。

**家の中で、** 主婦が夫や子供のためにしてやれることは山ほどあるし、第一、幼な子に手をかけてやることは、なにより楽しい。そう、夫が愛妻家のうちはいい、子供が小さいうちはいい。でも。夫が忙しさにかまけて家庭を忘れ、子供も母親の愛情よりは、友情とやらを大事にしはじめて、いまでは手をかけて作った食事もたまにしか家族の口にははいらない状況だ。日本人がみな豊かになったと新聞には書いてあるけれど、ぜいたくが普通になれば、生活費は拡大する一方だ。住宅ローンも教育費も、まだまだ先は長い。新聞を見れば毎日のように、社会で活躍する女性の記事が載っている。自分といくつも違わない女達の話だ。私ももっと積極的に生きなければ。とにかくまず、自分の自由になるお金を得ることだ。だけど、いまさら、家族に家事を押し付けるわけにもいかないし、仕事に追われてギスギスした生活になるのもいや。自分の時間は絶対に確保しておきたい。そして、精神的にもっと豊かな生活をしなければ。本当は、何か自分の知識や経験が生かせるような専門的な仕事のほうがいいけれど、世の中そんなに甘くない。やっぱり、働くならパート。これが、主婦側の事情だ。

**一方企業の側にも、** OA化の進展などにより、パートで間に合う仕事が増えたという事情がある。また、国際時代、サービス時代となって、営業時間やサービス提供は24時間化を迫られる一方で、雇用者からは、短時間労働化を求められているという事情もある。そして、なにより、パートであれば、人件費が格安で、景気変動による雇用調整が可能であるという利点がある。

**そんな双方の事情** が一致して、パート主婦はこの10年間増える一方である。また、特に女性の職場であるサービス、流通業では、戦力として欠くことのできない存在となっているのも事実だ。特に、子育てを終えた団塊の世代の主婦を狙っての企業の期待は大きい。そのため、最近では、不人気の"パート"という呼称に変えて、『準社員』『メイト社員』『フレンド社員』などイメージのよい名前が使われ始めている。

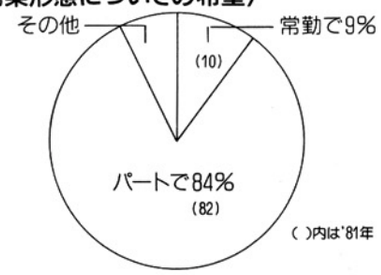
前回調査時(81.2)には全国に1ヵ所もなかったパートバンク(職業安定所が開設しているパートタイム専門の就職相談窓口)も、この5年間で37か所に増えている。今後も様々な分野でパート主婦が活躍することに間違いはないだろう。

**最近のパート主婦** の特徴は、パートへ出た理由が、より現実的(生活費のため)で、自分寄り(自分のこづかい、遊んでいるのはもったいない、生活に変化)になったこと、就職先が多職種化したことである。パートに夢を抱いて、というよりも現実を知ったうえでクールに自主選択して外へ出たということがいえる。

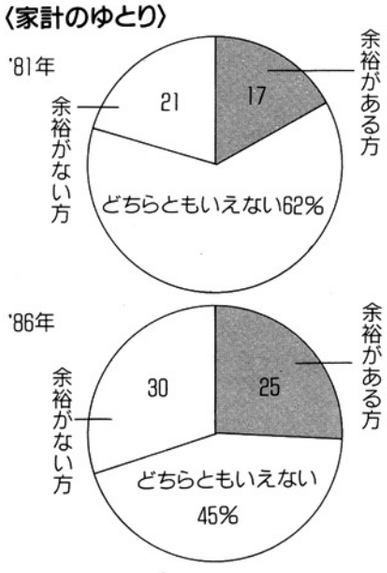
〈働きに出たきっかけ〉 ( )内は'81年

| | |
|---|---|
| ①自分で捜して | 41%(33) |
| ②誘われて・頼まれて | 29%(34) |
| ③知人の紹介で | 25%(21) |

〈就業形態についての希望〉




〈家計のゆとり〉




〈現在の職種〉 %

| | | | |
|---|---|---|---|
| ① | サービス業 | 46 | (56) |
| ② | 単純労働 | 16 | (13) |
| ③ | 一般事務 | 14 | (15) |
| ④ | 専門的職種 | 4 | (7) |
| ⑤ | その他 | 19 | (9) |

( )内は'81年

# 妻が変われば、夫も変わる?

5年前の調査結果に比べれば、主婦が働きに出ての変化は概して小さくなった。それだけ、
主婦が働きに出る条件が家庭内に出来上がったということだ。
主婦が働きに出ると、まず、主婦自身が変わる。そして、夫も少なからず、その影響を受けて変化している。

〈増えたものトップ10〉

| | | |
|---|---|---|
| 1 | パンティーストッキング購入量 | 57% |
| 2 | ブラウス・セーターの購入量 | 46 |
| 3 | かかとの低い靴 | 44 |
| 4 | 口紅の使用量 | 43 |
| 5 | 職場以外の友人との外食 | 32 |
| 6 | 喫茶店に行く回数 | 32 |
| 7 | ほお紅の使用量 | 31 |
| 8 | アイシャドウの使用量 | 30 |
| 9 | アクセサリーの数 | 27 |
| 9 | クリーニング店の使用 | 27 |

〈減ったものトップ10〉

| | | |
|---|---|---|
| 1 | テレビをみる時間 | 56% |
| 2 | 趣味に費やす時間 | 41 |
| 3 | 雑誌を見る時間 | 38 |
| 4 | 広告・ちらしを見る時間 | 36 |
| 5 | ラジオを聴く時間 | 36 |
| 6 | 家事をする時間 | 34 |
| 7 | 睡眠時間 | 34 |
| 8 | 新聞を読む時間 | 31 |
| 9 | スポーツをする時間 | 30 |
| 10 | 安売りセールの利用回数 | 24 |

〈妻は変わったか〉

| | | | |
|---|---|---|---|
| 妻の答 | 46% | 18 | 36 |
| | 変わった | どちらともいえない | 変わらない |
| 夫の答 | 34 | 25 | 41 |

〈夫は変わったか〉

| | | | |
|---|---|---|---|
| 妻の答 | 23 | 24 | 53% |
| | 変わった | どちらともいえない | 変わらない |
| 夫の答 | 22 | 23 | 56 |

〈家族の家事分担〉

| | | | |
|---|---|---|---|
| '81年 | 32 | 33 | 36% |
| | 手伝ってくれるようになった | 前から手伝ってくれていた | 手伝ってくれない |
| '86年 | 31 | 40 | 29 |

**女性が働くことは** おおいに結構、などと、ものわかりのいいことを言っていても、実際、自分の妻が働き出すことについて、いい顔できる夫たちはどれだけいるだろう。だから『生活を変えない』、というのが主婦が外で働くときの基本だ。働くことについての理解を得ることが第一で、協力などは、夢のまた夢。なにしろ、家のことはおろそかにするな、家事や子供のことで手抜きをするな、帰りは自分よりも遅くなるな、という条件を出されて働き始めるのだから、体は幾つあっても足りない。とにかく自分にだけは負担をかけるな、というのが夫たちの本音なのだ。しかし、自分の選択で働きに出た主婦としては、疲れたなどとは言えないし、手伝ってともいえないのが、辛いところ。とにかく、家のことはテキパキやって、職場でも、だからパートのおばさんは、などと陰口をたたかれないように頑張らねばならない。これが、働きに出た妻の立場というものだ。

**でも、働き出せば、** 何も変えずに済ませる訳にはいかない。毎日の外出にはパンティーストッキングは必需品だし、着るものだって馬鹿にならない。いままでのかかとの高い靴では、一日仕事には向かない。かかとの低い靴も2〜3足は必要だ。とにかく、必要品と身だしなみのために初月給はとんでいった。そして、人前に出る毎日、お化粧も女のたしなみだ。別に、見栄を張っている訳ではないけれど、意地でもパートやつれとだけは、いわれたくない。

**そして今の悩みは** 『自分の時間が持てない』ことだ。夫や子供とのコミュニケーションは、つとめて積極的にとるようにしているけれど、その分、自分の時間は減らさざるを得ないのが現状だ。自分の時間も大切にして、趣味だけは持ち続けていたいと思っていたけれど、家事と仕事の両立で、結局、自分の時間が犠牲になった。でも、これも、働きにでてまだ、1年たたない今だからこそのことだと思いたい。家事のやり方だって、知らず知らずのうちに変わってきた。スーパーで生鮮食料品を買うことにも抵抗がなくなった。それに、一番の変化は、知らん顔だった夫が時々は手伝ってくれるようになったし、ちょっと自分を見直していること。子供たちは、かなりしっかりしてきたと思う。もっといろんなことがバランス良くいくようになれば、きっと、趣味の時間だって作れるはずだ。

**家事と仕事が両立** していると答えた妻は84%、働きに出て良かったという妻84%、今後も働いていきたい妻83%と、妻自身はさらに働くことに積極的だ。そして、自分が変わったと思っている妻は46%、夫から見ても34%の妻がなんらかの変化を見せている。逆に、妻から見て変わった夫は23%、夫自身で変わったという人は22%。妻が働きに出て、まず変わるのは妻自身。そして、「変わるつもりのなかった」夫たちにも、徐々に変化があらわれているといえるだろう。

# パート経済学——働いての収支は?

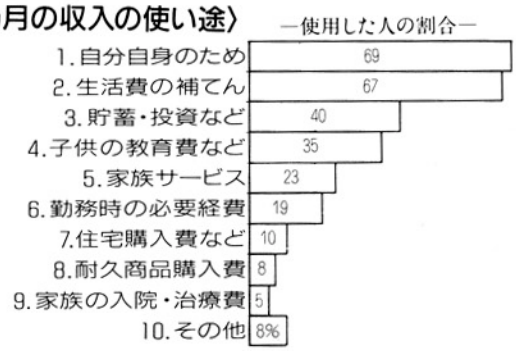
主婦が働きに出ての二大変化は、自由な時間が少なくなることと、金額の多少はあれ、とにかく、自分の収入というものができることである。今回の調査対象者の1か月の平均収入は65,300円。その収入が実際にどのように使われているのかをみてみよう。

まず、『先月の収入をどのような項目に使ったか』をみると、自分自身のため、生活費の補塡が多く、いずれも7割近くの人がこの項目に使用している。そして使用した金額(支出配分)では生活費の補塡分に21,500円、自分のために15,100円という計算になる。生活費としては、毎日の食費にあてた人が最も多く、自分のための出費としては、ファッション関係にあてた人が最も多い。

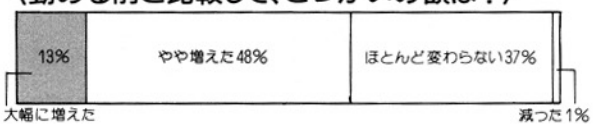
また、勤めに出てから始めた財テク関連では、自分名義の預・貯金を始めた人が6割、自分名義の生命保険を始めた人が3割いる。働きはじめて僅か1年以内に、これだけのことを始めるというのは、やはり主婦ならではの金銭感覚と言えるだろう。また、こづかいの増えた人も6割。ゆとりのパート経済事情も浮かびでた。

最後に、パートに出てから買ったものと買いたいものをみてみると、まずは、自分の靴や自転車、コート、ミニバイクなど、勤めにでる上での必要品が買われていることがわかる。そして、今後は、電子レンジ、大型冷凍冷蔵庫など、家事の省力化につながる商品、羽毛布団、自動車など、生活のグレードアップにつながる商品、そして、VTR、ビデオディスクなど、楽しい時間消費につながる商品が求められている。このように、働きに出れば、欲しいものも変わる。そしてそれが、モノ消費からサービス消費へと移行していくのも当然の動きといえよう。

## 〈1ヵ月の収入の使い途〉

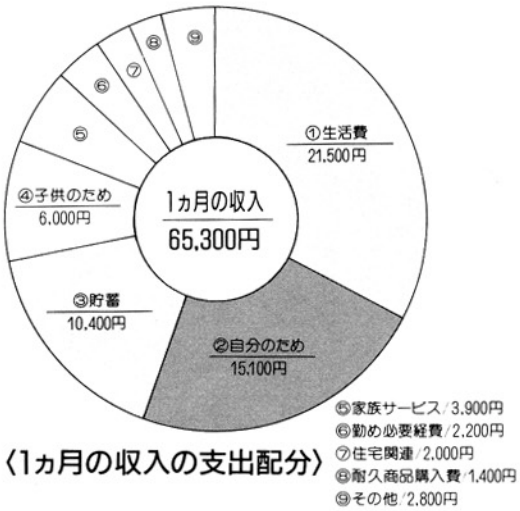



## 〈勤める前と比較して、こづかいの額は?〉




## 〈勤めに出てから始めた財テク〉

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 自分名儀の預・貯金 | 59% |
| 2 | 自分名儀の生命保険 | 29 |
| 3 | 証券会社での貯蓄 | 5 |
| 4 | 住宅購入のための財形 | 5 |
| 5 | 職場での社内預金 | 1 |




## 〈1ヵ月の収入の支出配分〉

## 〈勤めに出てから買ったもの・買いたいもの〉

**勤めに出てから買ったもの**

①自分の靴……35%
②自転車……23%
③貴金属・宝石…17%
④自分のコート…16%
⑤カーペット……12%
⑥ジャー炊飯器…11%
⑦大型冷凍冷蔵庫 10%
⑧ミニバイク……9%
⑨電子レンジ……8%
⑨自分の和服……8%

**これから買いたいもの**

①電子レンジ……17%
②貴金属・宝石…16%
③大型冷凍冷蔵庫 15%
④自分のコート…8%
⑤カーペット……7%
⑤羽毛ふとん……7%
⑤自転車……7%
⑤VTR……7%
⑤自動車……7%
⑤ビデオディスク…7%

企画編集/博報堂生活総合研究所(生活総研)TEL03(233)6450
発行/(株)博報堂
生活新聞 〈博報堂社内資料〉

# 妻のいい分・夫のいい分 ―微妙な夫婦のすれ違い

調査概要:「第2回パートタイマー調査」1986年11月実施。調査対象は26~50才の主婦で1年以内にパートタイムで勤め始めた人と、その夫。首都圏30km。主婦350サンプル。夫233サンプル。(注)第1回パートタイマー調査は、1981年2月に実施。同条件でパートに出た30~50才の主婦。300サンプル。

家庭の主婦は、働きに出る前に、主婦という仕事を持っていた。そうした主婦たちがパートとはいえ働きに出ると、家事や家族への影響が出ることは当然予測される。そこで彼女たちが、パートに出てから、家事の分担や家族関係がどう変わったかを、パート主婦自身と、彼女たちの夫に聞いてみた。

**◆家事は手抜きでも、若返って、はつらつと**

まず、パートに出ると家事は手抜きになるのかといった点から眺めてみよう。主婦自身は四二%が手抜きをするようになったと答えている。夫たちは三二%が手抜きをしているのではと答えている。「洗濯物をためないでほしい」(三十九歳)「スミズミまで掃除をしてほしい」(二十八歳)といった意見がこの数字を裏付けている。いままでは一日の大部分が自分の自由に使えた専業主婦にとって、パートの労働時間にその多くの部分を侵略されてしまうのだから、家事にしわ寄せが来るのはいたしかたないところだろう。しかし、主婦自身の心の中では、家事を手抜きしているのではなく、時間の使いかたを合理化しムダを省いているだけと、納得させているふしも伺える。その結果、「お金よりも時間を優先させて考える」という主婦は四三%にのぼっている(もっとも妻がそう考えているだろうと答えている夫は三〇%しかいないようだが)。

では次に、主婦が働きに出ると美しくなるかを聞いてみよう。「化粧がうまくなった」と思っている主婦は九%しかいない。しかしそう思っている夫は倍以上の一九%いる。同じく「年より若く見える」ようになったと思っている主婦は三五%。ここでも夫は四三%と主婦自身の感慨を上回る。主婦自身が謙虚なのか、夫の観察が甘いのか、どちらとも決めにくいところだが、ともかく主婦が働きに出ることは精神衛生上はよいことのようだ。

家事は若干手抜きという指摘は免れないが、同時に決断が早くなったこともまた事実のようだ。「ものごとを決めるのが早くなった」と思っている主婦は四七%と半数近い。しかし、ここでは夫の観察の方が厳しく、三七%と主婦よりも一〇%も少ない。仕事の場では家庭にいる時よりも早い決断を求められる場合が増えてくるが、家庭でその決断力を発揮している主婦はまだ多くないようだ。しかし、調査対象者がパートに出るようになってからまだ一年以内という新米パートさんだけに、テキパキ主婦の登場までにはまだ少し時間がかかるのかもしれない。

働きの場に出てみると夫の大変さが良くわかるという主婦も多い。三分の二の主婦がそう答えている。「男性の仕事が大変なのがよくわかった。特に営業関係の夫は大変なのだろうと思う」(四十九歳)「一日の仕事が終わって、夕方居酒屋に行く気持ちが良くわかる」(四十九歳)といった主婦側の発言にもそうした気持ちは伺える。しかし夫側の言い分を聞いて見ると、四六%しかそう思っている人はおらず、夫と妻のギャップはかなりある。

とはいえ、少なくとも働きに出てみて、夫との話題が増えていることは事実のようで、妻側四四%、夫側五七%がそう答えている。家庭の主婦がパートという家事と働きを両立させる形態を選んで、家から外に出ることで、世の中の仕事の仕組みに触れ、夫との話題も豊富になってくるだけでもパートに出た効果があったというものだろう。

**◆つきあいは仕事の場だけと、夫も妻もわりきっている**

パートでも仕事は仕事、当然仕事場での人間関係は今までのつきあいとは異なる新しい人づきあいを始めさせる。しかし、上図のグラフを見る限りでは、勤務時間以外のつきあいは主婦自身も積極的にしたいという人はさほど多くないし、夫の姿も意外に封建的だ。職場で知り合った女性だけで喫茶店に行くのを肯定している夫は二七%、男性も交えてとなると、八%しか「いい」とは答えていない。ましてや旅行やドライブになると、「行ってもいいよ」と答える寛大な夫は四%しかいない。もっとも、主婦自身も旅行やドライブに行きたいという人は四%しかいないから、欲求不満になるというほど束縛されているわけではないようだ。

**◆妻の自立は夫の自立、子供の自立**

働きに出ると夫の大変さはわかってくるようだが、男性一般への見かたはそれほど変わらない。特に八十一年調査に比べると今回の調査では男性の見かたが変わった人が減少している。そして発言の多くも「男性は大変だな」という見かたが圧倒的だ。しかし中には「やっぱり男性の社会は学歴社会」(三十四歳)「生活感がない男性も多いのだなー」(三十七歳)「人間的にも社会的にも素敵に生きている男性がいることを知り、自分にとってもいい影響があった」(二十八歳)などの発言も見られ、自分の人生感を揺さぶられた人たちも多かったようだ。

子供の教育に対する見かたが変わった人は少数だが、学歴社会を改めて認識した人が多い。それと同時に、「家事などできることから教え始めたい」(四十三歳)「女の子でも自立できるように技術を身につけたい」(四十歳)など、自分がいないことで、子供が自立しはじめたという発言をしている人も目立っていた。

妻が働きに出ての不満や心配がある夫は少ないが、「子供の面倒を良く見てほしい」(三十八歳)といった切実な声から、「接する時間が少なくなった」(四十七歳)といった甘えん坊の声まで届いている。心配の多くは事故、病気、疲労、といった本人の体を気遣うものだが、中には最近の風潮を反映して不倫、浮気を心配する夫も結構いた。

**◆休んでわかる、いたわりあい**

パートを希望する大きな原因は、家族に大きな迷惑をかけないで働きたいということなのだから、当然、帰宅時間の希望は家族の帰る夕方までという人が多い。主婦自身も子供の帰宅時間までには帰りたいと思っているし、夫もそうさせたいと答えている。妻と夫の若干の違いは妻がせめて夕食時間までには帰りたいと思っているのに、夫は自分が帰るまでには帰ってほしいと思っている点である。

これが、「主婦が会社を休む時」になると、妻と夫ではかなり見方が変わってくる。主婦自身は夫や子供の体を気遣い、子供の行事を優先させ、自分の体は二の次ぎと答えているのに対して、夫はまず妻の健康を考え、次いで子供の体や行事を優先すべきと答えている。そして夫自身の体の不調は他の原因の後に来るという、お互いが相手の体のことを第一に考える思い遣りが現れた結果である。

**◆パートの裏には助け合い家族**

主婦が働きに出る時に心配することの第一は家事が他の家族への負担にならないかということだ(「夫に負担をかけているのでは」と思っている主婦は三四%)。しかし現実にはそうした負担を感じている夫は少ない(夫自身「負担がかかっている」と答えているのは二六%)。実際の行動では二割弱の夫が台所に立つ回数が増えたり、自分の身の回りのことをする回数が増えたと答えている。前の頁でも説明されているように、家事は家族の他のメンバーが以前から手伝ってくれているという人が四割もいるし、新たに手伝ってくれるようになったという人も三割ほどいる。夫だけではなく、子供や親など、家族皆で働く主婦を手助けするというのが現代のパート主婦家庭の姿のようだ。

**◆働きに出ての決算は?**

家事を手伝ってくれる家族が多いことはすでに述べた通りだ。その結果からもわかるように、主婦がパートに出るに当たって、家族の協力度はかなり高い。六割の主婦は、夫は協力的だと答えているし、夫自身も五五%は協力していると答えている。自分も妻が働きに出られるように協力していると自負しているし、妻側も協力に感謝しているようだ。

理解度になるとその割合は更に高まり、夫婦共に七割近くが夫の理解は得られていると答え、夫婦間の回答ギャップは少ない。「家事の手抜き」「若く見られるかどうか」「時間の使いかた」など、働いてみての態度の変化、意識の変化についての質問においては、かなり夫婦の回答には隔たりがあった。しかし協力度、理解度など基本的な意識については、夫婦でのギャップは少ない。

では働きに出たことへの総合評価はどうだろうか。妻自身は働きに出て「よかった」と思っている人が八四%にも上るのに(前出)、夫もそう思ってくれているだろうと答えた人は四四%しかいない。そして夫自身、「妻が働きに出て良かった」と答えた人は同じく四四%である。一方、それ以上の割合で「どちらともいえない」と答えている。しかし「よくなかった」と答える人の割合が一割程度しかないことを考え合わせると、「妻がよければそれでいいのでは」「自分がどうということはできない」といった妻の自主性にまかせる態度の現れなのかもしれない。事実、「よかった」と答えている夫の意見を聞くと「収入が増えた」(五十四歳)「元気になった」(三十六歳)「貯蓄ができるようになった」(四十七歳)といった実利的な効果をあげる人も多いが、それと同時に「社会的視野が広がったようだ」(三十歳)「人間に対する理解が増し、日常生活でのゆとりができるようになってきた」(三十五歳)「判断力が付き、ムダがなくなってきた」(三十八歳)といった、妻の成長を喜ぶ夫の声も多い。家庭に閉じこもっていたくない、外の空気を吸いたいと家の外に出て行った主婦にとって、確実なメリットがここに示されているようだ。

最後に、今後夫は妻をどうさせたいと思っているのか(続けさせたいのか、やめさせたいのか)を聞いてみよう。ここでも主婦自身は八三%が働き続けたいと答えている(前出)のに対して、夫もそう考えてくれていると思っている主婦は三九%。そして、同じく妻を働き続けさせたい夫も三九%である。やはり夫は「どちらでもない」と思っているのではという人が四二%。まだ勤め始めて一年以内という経験の浅さが、今後の見通しの不透明感をもたらし、そのために判断不能ということもあるのだろうが、それとともに妻のことは妻自身が決めればよいのでは、といった妻の自主性を尊重する意見を反映しているのであろう。いずれにしても、今後はますますこのパートという職に就く主婦は増えるだろうし、その結果、影響を受ける夫も多くなるに違いない。そうした時、これらの結果を見ると、重要なポイントでは大きなすれちがいはなく、一応ホッとする結果だと思われる。